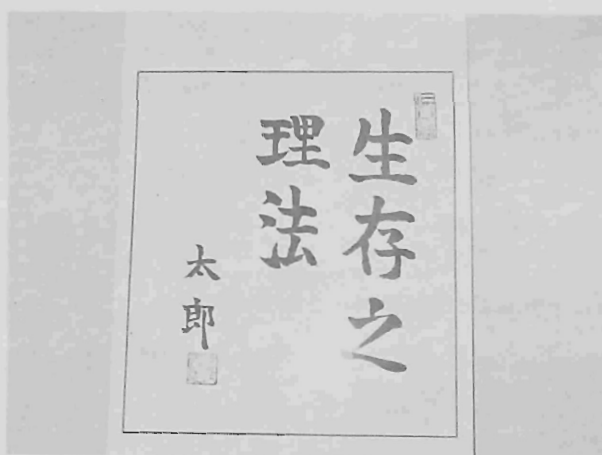


生存科学研究所

ニュース

Vol.1. No.2.

1986. 3. 10発行



目次

- 「Seizon」について 生存科学研究所 副理事長 熊谷 洋…………… 1
- 『科学および科学技術と人間』会議の概要…………… 2
- 『医薬品産業問題研究委員会』…………… 3
- ハーバード大学公衆衛生大学院・武見講座特別記念講演会…………… 4
- 生存科学の課題と方向—第26回生存科学研究会報告…………… 5
- エッセイズ・キュート…………… 7
- 維持会員だより…………… 7
- ニュース オブ ニュース…………… 9

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

電話 03-563-3518

「Seizon」について

熊谷 洋

1月10日発行の生存科学研究所ニュースNo. 1 創刊号で、生存科学研究所の英語名が正式に決定されたと、報じられた。即ち“Institute of Seizon and Life Sciences”となった。今迄の英訳 Sciences for Human Survival では故武見先生が提唱された「生存」の意味が十分にあらわされない上に、外国人には理解されにくいという二つの理由からであった。

61年1月18日の第25回生存科学研究会で、板垣與一先生が人間生存の体系図 Jonas Sal and Jonathan Salk, World Population and Human Values: A New Reality, N.Y., Harper & Row, 1981, p.159, Modified “Figure 66” by ITAGAKI を図示されて、深く、広い先生の学識と人生経験に裏付けされた、感銘深いお話しをして下さった。明治・大正・昭和と、故武見太郎先生と祖国日本の発展・崩壊・再建の歴史を共有された先生のお話は、筆者にも特にうたえる所が多かった。それは、祖国の興廃に連動して浮沈した思想の流れにかかわりなく、一貫した先生の思想的節操の片鱗に接した思いがした。

板垣先生は、生存科学を経験科学としてとらえ、その追求に実践的政策科学的方法を用い、価値観をも考慮に入れる必要性を強調された。

先生のお話について、出席会員からの質問と先生の懇切なお答えがあったが、特に“生存の理法”についての論議が熱心にくり広げられた。筆者の見る処では、「生存」についても、「生存科学」、「生存の理法」についても、

出席会員には夫々の理解があつて、一本にまとまるというようなものではなく、尚くりかえし、論議されて具体化されて行くべきものと思われた。

「生存科学研究会」設立の趣旨に於て、そのねらいと方向について、故武見太郎先生が、抽象的でなく、現実から離れることなく、計画的未来を考えて、成果を挙げる事を要望しておられた。

我々は、お互に科学技術による生活の支配下にある近代人として、自ら自覚することなく時代精神に支配されていることは、否めない事実であろう。それが現在次第に影をひそめつつある現代歴史主義の思想であれ、万物の科学主義の思想であれ、これらの思想から完全に自由であることは極めてむづかしい時代に生きていることは否めないであろう。つまり自己を見失い易い現代に生きていると見ねばならないであろう。

この様な、時代に生れ育ち、生き抜いて行くために、生存科学研究会の皆さんが、専門を超えた視点に立って衆知を集めて、“生存の理法”の理解と具体化に精進をつづけて居られる事は、誠に慶賀の極みである。

この会を終り、次回の主題をえらぶ段になって、会員の方から、次回も同一の主題を討議してはという発言もあつたが、筆者は、板垣先生のお人がらからにじみ出た今回のお話を、もっと時間をかけて、充分考察した上で再度考える事を提案して、全会員の御了承を得た。“生存”“Seizon”が国境を越えて世界の人々に理解されるまでには、まだ我々の努

力が必要であろう。

板垣與一先生のお話を拝聴した事丈でも充分、啓蒙された喜びにひたる事が出来たが、80年に近い、激動の時代を生き抜いて来られた、板垣先生の人がらにじかに接し得たことは、板垣先生の存在のなかに、“生存の理法”の一面を見た思いがした。この事はわれわれ

にとって役に立つ、よい事である。

ここに改めて、講師板垣與一先生に感謝の意をささげると共に、他面本ニュースに接しられた、未入会の方々も、すすんで本研究会に入会されて、「生存科学研究会」の討議に加われ、よい人生を送られん事を希って筆をおくものである。

『科学および科学技術と人間』会議の概要

『科学および科学技術と人間』会議(通称『科学と人間』会議)は「ライフサイエンスを中心とした科学技術と人間および社会との調和を図る上での問題点の明確化に関する調査研究」プロジェクトの検討委員会として学識経験者によって構成されたものであることは、前号のニュースでお知らせした。今回はこれまでおこなわれた会議の概要について紹介する。

* * * *

第1回の会議は渡辺 慧(ハワイ大学名誉教授)委員の講義を中心として「科学と人間」の問題が議論された。渡辺委員の講義は、それが本会議の公式的な意見ではないとことわりがあったうえで行われたものである。

「原爆と平和」の問題を例として、オッペンハイマーの「科学者は罪を知った」という言葉をあげて、それがレトリックであって、科学と人間には相対性原理のようなものがあることを述べられた。つまり科学というものと罪というものは、原子爆弾をつくったから罪をおかしたというようなそんな浅薄なことではなく、科学自体の持っている業というものがあつたということであつた。また専門とするパターン認識の問題から脳とコンピュータ

ーについて、人間と科学の相克というものは、左の脳と右の脳の相克のようなものであつて、これを解決するのは今日よりもっと進んだ人間そのものの認識が出発点となるであろうというものであつた。それを渡辺委員は未来の科学で認識学であると話を結んだ。この後その講義内容にもとづいてかなり深い議論が展開された。

* * * *

第2回会議は第1回の課題を受けて、碧海純一(東大名誉教授)委員が「現代科学技術の問題」と「人間行動における生得的なもの」の二課題について、きわめて含蓄のある講義を行なつた。第1回的话题を別の観点から深めた内容であつたといえる。

第3回会議は柳瀬睦男(上智大学前学長)委員が「生命の特異性」について講義を行い、各委員による活発な議論が展開され、ますますもつて「科学と人間」は深い内容に入つていったといえる。

紙面の都合で第2回、第3回はまた後ほど詳しく述べることにする。

医薬品産業問題研究委員会

医薬品開発の長期展望に関する研究は、表記のごとく「医薬品産業問題研究委員会」という名称の下に一年有余の研究を行ってきた。

* * * *

医薬品産業の規模は付加価値ベースでみれば製造業全体の約1.5%にすぎない。この割合は戦後一貫して変わらないが、このことは経済活動の他への波及効果という点では戦後を通してあまり大きくはなかったことを示している。しかし、社会活動という広い視野に立てば、戦後の医薬品産業の果たした効果はかなり大きなものがあったと言えそうである。

* * * *

さて、戦後、長期間にわたり成長を謳歌してきたわが国の、医薬品産業も1980年代に入って、その成長にかげりが見え始めてきた。それは丁度、成長曲線の上方転換点に医薬品産業が差しかかって来たことを示すものと見ることもできよう。何事であれ収穫逡減の法則が作用するのであるから、医薬品産業もその埒外ではありえない。実際、1960年代から1970年代にかけての期間には海外からの新技術（新製品）の導入があいつぎ、それが医薬品産業の高度成長を支えてきた大きな要因であった。ところが1980年代に入る頃からそれはかなり困難になってきている。（それを補うように国内での開発が成果を挙げてきているが）。

又、1960年代から1970年代には健康保険制度の整備とあいまって、医療需要の急激な増大が起り、これが医薬品産業の成長を支えてきたもう一つの要因である。しかし、1980年

代に入り国家財政の極端な逼迫のもとで、急激な医療需要引締政策がとられ、それが医薬品産業の需要成長率を抑制するものとなってきている。更に、1970年代までに数多く行われた薬価基準の引下げに対して、製品構成を素早く変えることによってその損害を回避してきたが、1980年代に入ってから矢つぎ早の大幅な薬価改正に対しては、かつてのように利潤を確保するような製品構成の調整ができなかった。

* * * *

このような状況のもとで、医薬品産業の成長に大きなブレーキがかかり、零成長、悪くすればマイナス成長に直面するに至っている。一方、医薬品産業の製品である医薬品が戦後のわが国の健康面で果たしてきた役割は大きなものであったといえよう。（もつとも、その数量的把握は困難であり、それ自体別の研究課題である）。

そこで、問題は、現在の医薬品産業の産業構造、企業行動及び国の政策のもとで、この零成長の状況を脱出することが可能であるか、可能であるとすれば、その方策はどのようなものであるかを探ることが目下の重要な課題となる。もし、脱出不可能とすれば、この産業の、また企業の社会責任を果たせなくなる。それは一産業、一企業の成長と衰退であると傍観できる問題ではなからう。

* * * *

上記のような認識のもとに本委員会では研究報告をほぼ下記のようにまとめる予定である。

- § 1 医薬品産業をとりまく国際的環境
要因の変化
- § 2 医薬品産業の成長と研究開発
- § 3 医療と医薬品との係わりについて
- § 4 薬価基準をとりまく問題点
- § 5 提言

- 「医薬品産業問題研究委員会」委員
- 市橋治雄 遠藤 勲
 - 大内幸夫 柴田久雄
 - 瀬崎 仁 藤野志朗
 - 古澤健彦 武藤武彦
 - 他に適時オブザーバー

ハーバード大学公衆衛生大学院・武見講座特別記念講演会

生存科学研究所は、ハーバード大学公衆衛生大学院H.V. ファインバーグ学部長と同大学武見講座のリンカーン・チェン武見記念教授を迎えて、昨年12月6日夜港区六本木の国際文化会館において特別記念講演会を開催。

講演会にはハーバード大学武見講座事務局長ライシュ氏、研究所の推持会員をはじめ59名の関係者が出席した。



ファインバーグ教授 リンカーン・チェン教授

* * * *

午後6時30分に開会、総合司会の土屋健三郎氏（産業医科大学学長）の演者紹介に続いてファインバーグ教授がAssesment of Medical Technology in Developing and Industrialized Countries（開発途上国と先進国の医療技術評価）と題して講演。その要旨は次のようであった。

「医療技術は、医療サービスの質の向上をも

たらしたが、一方では米国の医療費が1日10億ドル以上というように、医療費の上昇を招き、現在医療技術は解決の一部であると同時に問題の一部にもなっている。このような医療技術を評価する場合、以下の8項目が考慮されなければならない。

①技術的実用性および性能、②臨床上的有効性、③安全性、④費用と効果、⑤使う側に受け入れられるか、また魅力があるか、⑥研究上の価値、⑦医療に及ぼす影響、⑧倫理的問題。

この内特に、費用とその効果を評価基準として、米国と発展途上国の医療技術を比較した私の研究結果では、『はしか』を例にとれば、一人の人を死から守るために、米国では開発途上国に比べGDPを考慮しても4～5倍の費用を要することが明らかになった。従って同じ資源を有効利用するならば、開発途上国に投資する方が有効である。

より実践的に国内の問題として考えても、寿命を延ばしたり生活の質を向上させる目的を達成するのに、安い費用で達成する方法と高い費用で達成する方法がある。このような費用と効果を公正に判断するためには、医学、疫学、医療統計学、経済学、社会学、経営学等の領域の専門知識や判断が要求される。さ

らに、これらを分析する基礎となるデータを得るための投資も必要である。」

結論として、医療技術は使用すべきであるが、どの医療技術を使用すべきかは患者に対する最大の効果を考え選択すべきで、それには慎重で系統だった評価が必要である。

コメンテーターとして篠野脩一氏（国立公衆衛生院疫学部長）がコメントを行い、フロアーからも多くの質疑がなされた。

* * * *

続いてリンカーン・チェン教授は、Hunger and Malnutrition: Prospects and Challenge（飢餓および栄養失調：展望と挑戦）と題して講演。その要旨は次のようであった。

「人類の歴史にとって20世紀は、科学・技術の進歩の画期的時期として印されるであろう。この科学・技術によって、地球上の全人口を賄う食糧の生産が可能となった。しかし現在、世界全体で少なく見積もっても5億人が栄養失調になっている。

栄養失調の半数を占めるインドを例にとっても、緑色革命のお蔭でインド国民全員を賄う食糧生産が可能となったが、現実には国民の約30%が飢えている。その理由としては、感染症、下痢等による栄養補給の障害、食糧生産と消費との間の不均衡、利用可能な医療技術と実際の使用との間の不均衡等が挙げられる。アフリカの場合は、農業の生産性が低いために食糧生産が十分でないことに問題がある。さらに政治や気象上の問題がその状況をさらに悪化させている。

このように、栄養失調の原因は国によって異なっている。

では、この地球上から栄養失調をなくすことは可能であろうか。そのためには、資源の乏しい地域で農業の生産性を上げる技術等、開発途上国が求める技術に対する投資と、社会内部あるいは異なる社会間において、必要な技術をそれを必要とする人々に適正な価格で到達させるための投資が要求される。このような地球規模の不均衡に対し、開発途上国が抱える独自の問題を、人的にも技術的にも、独自に解決できる能力を見出すことができれば、栄養失調をなくすことは可能である。

最近、多くの国で栄養失調の問題を解決することができた。例えば日本自身がそうであるし、韓国もそうである。これらの国々は、自由経済体制の中で経済が発展したために解決した。しかし中国、キューバ、チリ、コスタリカ、スリランカ等は、経済的には貧しいが、この問題をほぼ解決している。これらの国々は政治体制が異なるが、共通している点は、社会サービスすなわち教育、保健等に大きな投資をしたということである。」

小泉明氏（東京大学医学部教授）のコメントにつづいて、フロアーから活発な質疑がなされたが、予定時刻を30分超過したので、この問題は今年5月にボストンで開催される第2回武見国際シンポジウムで引き続き討議することとして、講演会は午後9時盛会裡に閉会した。

生存科学の課題と方向 — 第26回生存科学研究会報告 —

1月18日、経団連会館において第26回生存

科学研究会が開催された。

本年度の主題は、すでに「ハイテクノロジーと生存科学」と決っており、年4回開催の予定。今回はその総論ともいべき論題で板垣與一先生（一ツ橋大学名誉教授、亜細亜大学教授）から「生存科学の課題と方向」が提案討議された。

生存科学はマクロの生存とミクロの生存の統合の上に学問を築くもの。ミクロでの生物としての人間の生命の進化は、適応—特に創造的革新的適応により行なわれる。それを支える環境その他の諸要因が、「人間生存の体系図」としてニュース創刊号に掲載されている。それを更に肉付けを行い、意味趣旨などを推し拡げて詳しく述べられた。（詳細は報告書または出版物にゆずる）

* * * *

「生存科学は実践的である」（武見語録）

生存科学は自然科学、人文科学、社会科学を踏まえたものであり、そのパラダイムは今迄の科学の個々のパラダイムで考えられることを超えている。ホーリズムではなく経験科学であるが、いわば根源的の学問である。

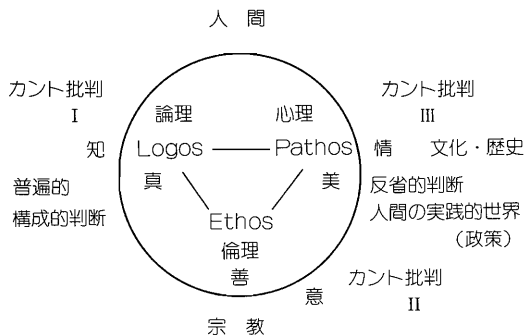
従来の経験科学のような単なる事実やデータの収集という帰納的方法のみでは成立し得ない。従って推理も重要である。

問題に即して仮説を立て、生存の危機意識を前提として、解決すべき問題群をとらえ、新しい認識により現実を変えてゆく（形成する）。その意味で実践的政策科学である。ポッターの書物「よりよき世界を求めて」と同じように、生存科学は、“よりよき”を求める実践でなければならないと思う。

討議：《生存の理法に連関した形で生存科学を考える》

生存の理法とは、判断の世界であろうから、

人間は……黒板に丸を描いて、Logos Pathos Ethosと考えながら書きこんでいく。



* * * *

「生存とは社会的文化的事実として考える」（武見語録）

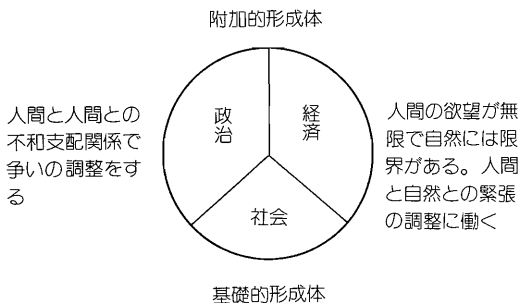
生存科学は今日までの「分けて考える科学」でなく、諸科学の統合—即ち諸科学の相互作用関係のプロセスの中で、言い換えれば諸科学の相互作用の「場」で、人間的、歴史的、社会的現実としての生存の事実を明らかにすることをパラダイムとする。

それは一般理論としてパラダイムが出来るものではなく、動的な相互作用の場の構造を明らかにし得るようなパラダイムである。

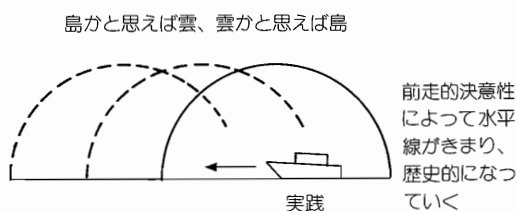
そしてその動的な均衡に『生存の理法』が働く。

討議：《政治、経済、文化の3要素にならないか》

社会が基礎として根底にある、として考えながら図を描く。



生命体には適応が必要である。自然的未来ではなく、計画的未来に適応する。革新的適応を水平線とし、未来的秩序を形成するように適応することが重要である。



エッセイズ・キュート

スペースシャトル・チャレンジャーの爆発事故は「人類は進歩のためには、生命の危険を冒すのもやむをえないか」という古くて新しい問題を改めて提起した。

日本で心臓移植が始めて行われた時、国内にごうごうたる批判の声があがったが、当時武見先生は「このような段階を通り抜けなければ、医学の進歩もないことは事実だ」と言われて、安易に批判論には組しなかった。

今回、スペースシャトルの打ち上げを続行するかどうかについて、アメリカは、大統領も国民も、『ゴー』を選んだ。この判断は正しいと思われるが、問題が残った。「関係者がコンピューターを過信していなかったか」ということである。

ジョンソン宇宙センターによると、チャレンジャーには至るところにセンサーが設置されており、異常な事態が起これば、いち早くこれを地上に知らせてくることになっていた。

ところが2月1日の航空宇宙局(NASA)の発表によると、右側の固体ロケットには爆発の十五秒以上も前から異常が発生していたという。しかしNASAの誇るコンピューターシステムは何の異常信号もキャッチしていなかった。どうやら今回の事故は、固体燃料のリークという極めて初歩的なミスのようなものである。もしこれが真実としたら、コンピューターへの過信という批判はまのがれないであろう。

(〇)

維持会員だより

恩師武見会長を偲ぶ

変貌著るしい今日の社会において、武見先生から直接指導・教育をうけた人々は時がたつにつれて各々の活動の場において、当時の叱咤、激励をうけた一駒一駒が甦っていることであろう。物質的豊饒と成熟という表現での現在は、他方精神的不安と生甲斐に不安を内蔵している様子が感じられる今日である。私

達は、武見先生が遺された「生存之理法」を探究しつつ、積極的に未来に向って、健康と幸福を築きあげ、人々の不安を少しでもとりのぞいてゆく使命をもっているといえる。私が今日まで歩んで来た人生の中で、先生から直接教えていただいた医師としての本質に係る思い出、そして鮮明なるインパクトを短文乍ら綴ってみた。読者のご叱責をいただければ幸である。

* * * *

随分ながく歩いてきたものだ。この60年はまた夢のように過ぎたようでもある。私も人並に還暦を過ぎ、老年の仲間入りというわけだ。高令にもめげず医師会の陣頭指揮をとっておられる諸先輩からは叱られるかもしれないが、60年の節目（ふしめ）という心情が背景となり、来し方を振りかえり、又新しい出発に人生の価値を創造して日々進んでゆくことを念じている。

外科医を志して早35年たった。当初の爆発的連続的行動と情熱はもう色あせて了った。然し多年の行動と経験の蓄積は今ゆつくりと燃焼しつつ生命の本質、医療の根源に一步一步迫っている毎日である。私の人生は各年代に優れた恩師が次々に現われたが、何といっても最も強いインパクトをうけ、一瞬の休みもなく医人としての生き方を生々しく他界からパンチを与えてくれているのは、世紀の思想家武見太郎先生である。想えば32才の若輩で東大第二外科より富士吉田市立病院長に迎えられ、結核療養所長外科部長を兼任、日に夜をついで地域医療に全力投球していた頃、当時としては国民皆保険以前の僻地であった地方の小医師会に就任早々の若き武見日医会長は国保の権威蓮田常任理事と共に富士吉田市医師会、市立病院、保健所との協同事業による初期段階頃の臨床検査センター、看護学校新設の御祝にかけつけられた。眼光炯々として医療の未来に素晴らしい構想をのべられた武見先生とはじめて膝を交えて日本の医療の方策について論じているうちに、唯我独尊、高慢智機な青年医師を自負していた私は、その全身から放射してくるエネルギーを内蔵している巨人にすっかり魂をすい込まれて了った

のである。爾来先生への限りない畏敬と共鳴が、少しも衰えずに私に投射されている。数多い日医常任理事会の中で最も心に刻まれているのは、昭和56年あの数回の大手術に耐えられ、衰弱の身体をおして、術後はじめてご出席になったときのことである。日本の医療の未来について先生は、激しいエネルギーを放ち乍ら我々を叱咤激励されたあの強烈な印象は、時がたつにつれて^{きんぜん}燦然とダイヤモンドのように輝きながら、いつも私の胸に迫ってくる。病床で全身拡大の癌と斗い乍ら今日の医療のおかれている姿を見きわめておられたのだ。何と明哲な頭脳の持主であったことが、誠に驚異なるかな。先生が日医会長を辞されたあと私財を投じて生存科学研究会を創設され、毎月人類生存の理法を探究すべく、学際的に医師は勿論、人文科学、社会科学、自然科学の権威を集められ、主宰されていたその最後となった日に、原子物理学の理論を生物生存の姿に投影され「安定と不安定」の平衡について述べられたのであるが、その会の直後私は「このお彼岸の中日に、宮城県医師会長のおはからいで、奥州平泉在の亀卦川守先生の菩提をたずねて参りました」と告げると進行癌と斗って明かに苦悩のお顔が、仏陀のような温かいまなざしで、今まで一度も言われたことのない「有難う。ご苦労さま」と言われ「蓮田元常任理事もこの世を去られたよ」とつけ加えられた。私の全身は硬直した。これが先生との最期の会話であった。先生に常任理事の2年間で、ご教示をうけた核心は「投身」である。医師の根源は、あらゆる科学技術を吸収して人間が生まれて来た意味「個体発生は系統発生をくりかえす」と述べられた中にあると信じつつ、毎日の診療の一つ一つ

を大切にしている今日である。

* * * *

先生の警咳^{けいがい}に直接接した現存の我々には、後世の人々に先生の魂を伝えてゆく責任がある。それは単なる回顧でなく、困難・混乱・不安が募れば募る程現役の日本医師会長の時に示された諸命題に戻って、その対処、解決の努力を正しく進めなければならない。医学

が未来に向って誤ちのないように進むに当って、医師としての私は益々生存科学研究会の各学問の分野の諸兄から、機会あるごとにご指導ご教示を賜りたいと思い、あえて小文を投稿した次第である。ご批判いただけることを。

(会員・神奈川県 馬場 甫)

ニュース・オブ・ニュース

ニューロサイエンスの新しい展開

—生存科学研究所第1回公開講演会—

前号で計画を紹会した、研究所主催による生存科学研究推進、普及のための公開講演会が、3月1日午後1時から、大阪商工会議所国際会議場にて開催され、多数の一般参加者、研究会メンバー、研究所維持会員等が出席、熱心な討議がなされた。

主題は『ニューロサイエンスの新しい展開』

熊谷洋生存科学研究所副理事長の挨拶の後、脳生理学の立場から京都大学・霊長類研究所・久保田競教授が、神経薬理学の立場から大阪大学・医学部・吉田博教授が、精神神経科学の立場から、とくに老年痴呆を中心に大阪大学・医学部・西村健教授が講演。その後山村雄一大阪大学前学長の司会のもとにパネル討論がおこなわれ、バイオエシックスをふくむ種々の問題が討議された。(詳細は次号)

なお今後もこのような講演会が各地で行われる予定である。

* * * *

『科学と人間』会議傍聴記

1月24日、都内某ホテルの一室において第3回『科学および科学技術と人間』の会議が

開催された。

学術的な紹介はニュース本体にゆずり、ここでは会議の雰囲気の一部を紹介する。

当日の話題提供者の柳瀬先生は直前にイタリヤから帰られたばかりであるにかかわらず出席、この会議のために物理学者としての科学的立場と、敬謙なキリスト教信者、神学者としての宗教的立場から、「生命の特異性」について「人間原理」と「宇宙原理」とを比較しながら述べ、人間の実在は気の遠くなるような僅かな確率のうえに出来ているが、今やそういうものがたどれるようなデータを手に入れられる世の中になってきたことを指摘された。

その後の討論では、科学技術の発展による科学の進歩で人間をどう理解出来るか、人間がその科学をどう発展させ、その科学技術をどう選択するかというような問題について、深く深く掘下げる議論がなされた。

広い学識と、深い人間洞察と、長い人生経験をもつメンバーの諸先生の討論の真意を伝えることは困難なことであるが、その真剣な討議に強い感動を覚えた。

メンバーの、この問題への取組の熱心さは、

会議終了後もホテルのロビーにおいて討論が延々と続いていたことを紹介するだけで足りよう。

この会議録が一日も早く出版されることが期待される。

* * * *

生存科学研究会会長決まる

1月18日の第26回生存科学研究会において、武見先生ご逝去のため長く席を欠いていた会長に、熊谷 洋先生（日本医学会前会長、生存科学研究所副理事長）が大江精三運営委員長はじめ全会員の推薦を受けて就任。

生存科学研究所の重要な事業の一つと位置づけられた研究会に、研究所副理事長の熊谷先生が就任されたことにより、研究会の運営は一段と強化された。

研究所の重要事業であるハーバード武見プ

ログラムの日本委員会委員長に研究所理事長の茅先生が、今1つの重要事業「科学と人間」の会議の責任者に副理事長の藤井先生が就かれており、研究所の事業推進体制は万全の構えが固まった。

又、当日の会議において、研究会の内規で定める昭和58年12月20日（武見先生ご逝去の日）以降参加されていた会員も、当然従来からの会員であることが全員の意志として確認され、更に新に4名の会員が承認され、紹介された。（なお、会員は研究所維持会員であることを資格条件の一つとしている。）

次回は4月19日（土曜）。

スピーカーはリハビリ・ロボットを研究している舟久保先生と、盲導犬ロボットを研究している館先生。

☆研究所からのお願い☆

研究所運営の重要な基盤となる維持会員の継続ご寄付（維持会員会費）の当年度分を未納の方は、是非今年度中（3月中）にお納め下さい。また維持会員への参加を拡大するために、ご友人等に当研究所のことをご紹介いただき、維持会員への参加をおすすめ下さるようお願い致します。

編集後記

ニュース創刊号いかがでしたでしょうか。編集作業に不慣れなため、色々不手際がありましたことをお詫び致します。

茅先生の「ニュースの発行によせて」の中の年号の昭和の年数を西暦に間違えてしまいました。お詫び方々ご訂正をお願い致します。それぞれ1935年を1960年に、1920年を1945年にお直し下さい。

今回も維持会員のお便りを戴きました。今後とも、研究所の活動、研究会の研究、研究所ニュース等についてご意見、ご要望等をお寄せ下さい。